

(続紙 1)

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	金 炳周
論文題目	朝鮮後期邑治に関する研究—水原華城と三南大路の関係を中心に		

（論文内容の要旨）

18世紀末、朝鮮に建設された水原華城は、文献史学、都市計画学、建築史学といった様々な分野において、朝鮮後期の「近代性」を現わす都市として重要視されている。そして多くの研究者は、『朝鮮王朝実録』『華城城役儀軌』を史料として、華城は「三南（朝鮮南部の穀倉地帯）と首都漢陽を結ぶ交通の要衝に建設された商業中心地」であり、それは実学的思考の所産であったとする。しかしながら、実際に朝鮮における幹線道路の体系の中で華城がどのような位置を占めていたのか、また、その幹線道路と華城とがどのような形で結ばれていたのかという具体的な様相についての考察は、充分に行われてこなかった。本論文は、これまで見落とされてきた、この具体相の解明に取り組んだものである。

本論文は五章からなっており、それぞれ以下のことを明らかにしている。

第1章では、華城が三南大路という幹線道路上に建設されたこと、その大路を華城の内部に貫通させたことを明らかにしている。また、華城内外の三南大路を拡張する工事が行われ、そこに駅（迎華駅）が新設されたことを論証している。

第2章では、邑治と幹線道路とは、接続路を介して結ばれるのが一般的で、幹線道路から邑治へ入るためには、この接続路を経て邑治の正門（南門である場合が多い）を経由しなければならなかったことを明らかにしている。そして、接続路を経由することが「蔵包」された「安穩」な邑治の空間的特性を守ることが可能にしたという。これに対して、華城は接続路を持たず、三南大路を貫通させているのである。著者はここに華城の空間的特性の「近代的」特質を見出している。

第3章では、三南大路の貫通に現れている華城の空間構成、および空間利用の特徴を明らかにしている。三南大路の貫通によって、華城には一つの正門ではなく、「長安門」「八達門」の二つのメインゲートが備えられることになり、市塵・場市・駅などの商業・交通施設は、すべて三南大路沿いに配置された。また、この長安門と八達門は、三南大路上に建っているため、甕城の出入口が側面ではなく、正面に開かれるようになった。このように正面の出入口を備えた甕城は、他には類例がないものであることを指摘している。

第4章では、華城を貫通する三南大路と、18世紀朝鮮の経済・商業史的条件との相関関係を解明している。18世紀に入ると、官の統制から外れ、商品の買い占めで利益を得る私商都賈が登場する。ここでは、これら私商都賈の活動舞台が主に幹線道路上であったこと、華城建設の主体である朝廷がこれを明確に認識していたこと、また、華城に三南大路を貫通させたのは、このような問題意識と深い関連があったことを「華城府内新接富実戸家蔘区画節目」（『備辺司膳録』正祖21年2月22日条）を根拠として明らかにしている。

第5章では、華城の龍脈と水口について考察している。朝鮮の山水観においては、山のつながりに沿って気が流れると考えられており、龍脈は長くつながっていなければならないとされる。また、この龍脈に沿って流入する気を蓄えるため、水口は必ず閉じられているべきものであった。しかし、華城は龍脈を備えておらず、水口も広く開かれている。また、「大川」という川が華城の内部を貫通しており、「明堂水と客水」という邑治が備えるべき川の在り方とは異なっている。大川の貫通によって、異例的に二つの水門が設けられた。邑治は山水によって安穩に取り囲まれることが重要な条件と考えられていたが、華城ではそのような考え方を新しく解釈しなおして、周囲に開かれた都市空間を実現することが求められたことを明らかにしている。

以上のように本論文では、他の邑治が接続路を介して幹線道路と連結されているのに対して、水原華城は直接幹線道路を貫通させる形で建設されたことが決定的に重要な意味を持つことを指摘し、朝鮮における商業史の展開過程の中に華城建設の意味を位置づけ、「近代」に向かって変化していく都市空間の変容過程を明らかにしている。

(論文審査の結果の要旨)

朝鮮王朝時代の都市は漢城（現ソウル）を中心として、地方の中核となる多くの邑治から構成されていた。本論文の研究対象となる水原華城はそのような邑治の一つとして18世紀末に建設された完全な計画都市で、その建設過程についても『華城城役儀軌』が存在することから、都市建設の技術に関する方法論や制度的側面に関する研究が重ねられてきた。しかし、華城建設過程の具体相については十分に明らかにされているわけではない。本研究はこの点の解明を試み、大きな成果をあげている。

著者は、華城が大路に貫通される形で建設されたことに着目する。多くの人が知るこの事実は自明のこととされ、この点に焦点をあてた研究が行われることはなかった。華城を貫通する大路への着目こそがこの研究の独創性を明確に示しており、このことが論文全体の展開の骨格をなしている。本論文では、まず、この大路が三南大路であることを論証することで新たな知見を提供する。一方、『大東輿地図』に描かれた邑治が例外なく接続路を介して幹線道路と連結されていることを見出し、従来の邑治では「蔵包」された「安穩」なところに立地することが求められたことを跡付けている。しかし、華城には接続路がなく、「四通八達」する開かれた都市空間とすることが求められたという。このことは邑治に囲み閉じられた空間を求める従来の価値観との葛藤をもたらすことになるが、著者はこの過程を地図や地理書、王室関係の文献などの史料を詳細にたどることで明らかにする。そして、この葛藤の中に華城の空間特性の「近代化」への胎動を見出していることは、18世紀朝鮮の都市に関する議論に新たな展望を示すものといえる。

以上のように本論文では、華城の空間特性を形成する上で最も重要な事柄として「三南大路の貫通」を位置づけている。そして、これに続いて華城が「三南大路の貫通」という都市構成をとることになった原因を経済史的側面から跡付けており、この部分は本論文中の白眉といえる。

従来、建築学の分野における18世紀朝鮮の邑治に関する都市論、都市史の研究には、当時大きな展開を見せた経済情勢を視野に入れて論じた例はない。また、近年注目を集めている18世紀朝鮮の商業史の研究では、具体的な場所に関する言及が希薄である。本研究は十分に文献を渉猟し、華城に三南大路を貫通させたのは朝廷が私商都賈の活動に対抗し、それを制限するためであったことを論証することで、両分野の研究の穴を埋め、さらに両者に架橋することで新たな展開を促すに足る成果をもたらしている。

最後に、この研究は風水に関する言説の中で華城の空間特性がどのように解釈されたかについて論じている。建築学分野では都市や建物の構成がどのように風水地理思想を反映したものであるかについての研究が数多く重ねられてきた。しかし、ここでは近代に向かう途上で建設された都市（華城）が、風水地理思想に適合しない点をめぐってどのように議論がなされたかをたどり、そこに風水の新しい解釈が生まれていたことを指摘している。この論点に関する史料は多く、この研究で十分に論じ尽くされているとはいえないが、今後の研究の展開が期待される新視点を提供しており、評価できる。

以上のようにこの研究は、文化・地域環境の認識・構築・保全・運営を総合的に考察する共生文明学専攻文化・地域環境論講座にふさわしい内容を備えたものといえる。よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年1月12日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降